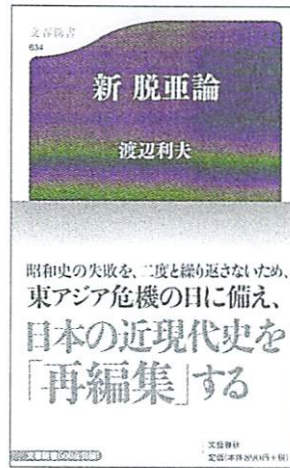


## 本書の主要目次

先祖返りする極東アジア地政学  
陸奥宗光の日清戦争—機略と豪気  
朝鮮近代化最後の挑戦—金玉均と福澤諭吉  
東アジア勢力確執の現実—果てしなきロシアの野望  
日露戦争と日英同盟—海洋国家同盟成立の意味  
韓国併合への道程—併合は避けられたか  
台湾割譲と近代化—日本の統治がもたらしたもの  
第一次世界大戦とワシントン体制—追い込まれる日本  
中国とはいかなる存在であったか—分裂と挑発  
海洋国家同盟か大陸国家提携か—日本の選択  
「東アジア共同体」という錯誤—中国の地域覇権主義を見据えよ  
日米海洋国家同盟を守る—自衛権とは何か



## 新脱亜論

渡辺 利夫 著

文藝春秋  
934円 (税込み)誰を友とすれば  
日本人は幸福か？

評者

寺崎 修

武蔵野大学長

本書はアジア経済論を専攻する高名な経済学者が「現在の極東アジア地政学は、開国維新から日清・日露戦争開戦前夜の明治のあの頃に、先祖返りしたと思わせるほどまでに酷似してきた」との認識のもとに、福澤諭吉の「脱亜論」（明治十八年）に倣って執筆した平成版の「脱亜論」である。恋人といわれるほどに朝鮮を愛し、その近代化を願っていた福沢が、一向に西洋文明を取り入れようとせず中国に従属し政争と内乱を繰り返す朝鮮に見切りをつけ、以後アジア東方の「悪友」を「謝絶」と宣言したのが「脱亜論」の骨子だが、渡辺氏は、この主張に深く共感する。福沢の「脱亜論」については、歴史研究者の多くが、朝鮮・中国を蔑視するものとして厳しい評価を下すが、氏はそのような理解を一蹴し、むしろ国際関係に対する冷徹なまでの福沢のリアリズムを高く評価する。

また氏は日清、日露戦争に至る歴史をたどりながら、弱小国日本がなぜ次々と勝利をおさめることができたのかを論じ、福沢が「英人の必ず我れに応ぜんことを信するものなり。抑も英人が自国の利益を衛るために第一の目的とする所のものは、露国の南進を防ぎ彼をして海浜に頭角を現はすこと勿らしむるの一事にして」と、いち早く「日英同盟」の必要性と可能性に言及

していたことに注目する。極東アジアに深入りをせず、イギリスとの提携を求めた福沢の提言は、彼の生前には実現しなかったが、やがて日の目を見ることになるからである。

さらに渡辺氏は「誰を友としていた時に日本人は幸福であり、誰と関わった時に不幸であったのか」を問いかける。結論として氏は、日露戦争を勝利に導いた日英同盟、あるいは戦後の安定と繁栄をもたらした日米同盟のような強力な同盟関係が存在した時、日本および日本人は幸福であり、「日英同盟廃棄から日米同盟成立に至る三十年」は不幸だったと指摘する。すなわち氏は「不条理に満ちた国際権力世界を生き延びていくためには、利害を共有する国を友邦として同盟関係を構築し、集团的自衛の構えをもたなければ容易にその生存をまっとうできない」「同盟の相手は強力な軍事力と国際信義を重んじる海洋覇権国家であって欲しい」と主張する。

近年、「東アジア共同体」構想に日本も加わって「大陸中国」と連携を深めるべしとする主張が多く見受けられるが、氏は、断固として反対する。「日本にとっては何とより、東アジア全体にとつてまことに危険な道である」と。歴史的教訓を踏まえた警世の書である。